
～ミスティ・ローズの部屋へようこそ～

あんじえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミステイ・ローズの部屋へようこそ

【Nコード】

N0186E

【作者名】

あんじえ

【あらすじ】

占い師ミステイ・ローズの部屋へやってくるさまざまな人たち。今日も孤独につまづいた誰かさんが、ほら：「ミステイ・ローズの部屋へようこそ」。

第一話 智子

「占い、初めてなんです」

智子はそう言って、落ちつきなく目の前の椅子に腰掛けた。

「そう」

占い師はそっけない。智子の顔も見ないで、その一言だけ投げた。

まったく場違いのところへ来てしまったかもしれない——こんなところで貴重なお金を遣うなんて、どうかしてた。

早々に後悔の感情が沸き起こり、智子は思わず、「もういいです」と言って立ち上がりそうになった。が、その衝動をかろうじて常識という体裁で押さえ込むと、智子は仕方なしに深く息を吸い込み、そわそわと部屋の中を見回した。

ふんわりとしたエスニック調の香りが、先ほど智子が怖々入ってきたドア一枚を隔て、確実に現実社会との隔絶を強調しているかのようだ。

壁じゅう天使の絵で埋め尽くされ、占い師の背後にある背の高い古びたキャビネットの中にまで天使のオブジェがずらりと並べられているのを見ると、やはり異空間に来てしまったのだと思う。

ビーズの垂れ下がったスタンドから放たれる黄色い光が、さして広くもない部屋を包み、天井から吊り下げられた惑星をモチーフにしたモビールをきらきらと輝かせていた。

上目遣いにそれを見た智子は、心の中で（水、金、地、火、木、土、天、海……）とつぶやいてみる。

近年、冥王星がこの惑星系列からはずされたことぐらいは知っていた。

（このモバイルについている惑星は八つだわ。最初から冥王星ははずされていたんだ）

「あなたの生年月日をおっしゃってください」

女占い師の少しハスキーな声がそう智子に言い、智子のはじかれたように答えた。

「あ、はい。1972年6月30日です」

占い師はそれをサラサラッと紙に書き留め、何やら数字を計算すると、「それで、お悩みは？」と聞く。占い師はその時初めて顔を上げて、智子を見たのだった。

その目があまり真っ直ぐに自分を見るので、智子はやや驚きを持って、だが自然と作り笑いが出た。

「ええと……あの、私のこれからの金運を占ってください。生涯、お金に困らないで生活できるでしょうか？」

「ふうん……」

占い師は一組のタロットカードを手にとると、じつに鮮やかにカードを切り、月と星を金糸で刺繍した黒いテーブルクロスの上に円を描くように並べ出した。

それから何枚かのカードをめくったが、その指先が優雅で、よく磨かれ薄っすらとエナメル塗られた桜色の爪と、指にはめられた数個の大きな彫金の指輪が、閃くカードとともに智子の頭に鮮烈に記憶された。

「あなたの金運は安定していません。お誕生日から見ても、お金は貯まらない性格ですね。すぐに大きな物を衝動買いしてしまう。気をつけないと、一生ローンをかかえることになりそうです——すでに、ローンがいくつかありますね？」

（やられた）と、智子は思った。

そうなのだ。

智子が今日、こんな今まで来たこともないような異次元の場所に思い切って足を踏み入れたのも、まさにそれが聞きたかったからなのである。

「先生、そのローンなんですが——私、全額返済できるでしょうか？」

今度は椅子から身を乗り出して、智子は聞いた。

「もう、いっぱいいっぱいなんです。いつか、ローンから解放される日が来るのでしょうか？」

「ローンは払い続ければいつか必ず終わります。あなたの場合、これ以上遣わないことが肝心ですよ」

当たり前のことなのだが、占い師の言葉に智子は妙に納得した。

智子は今まで、一つのローンが終わわりそうになると、また次のローンを組んで大きな買い物をしてしまうという過去を繰り返してきたのである。その結果、現在五社で約四百万円ものローンをかかえている。返済元金一万円に対し、利息だけでその倍以上取られているのだ。ということは、最終的に、八百万円以上の返済をすること

になる……そう考えただけで、身が震えた。しかし、今さらどうすることもできず、毎月、ただただ支払いに四苦八苦しているのである。

もちろん、借りなければいいことは百も承知だ。
だがそれができれば苦労はしない。

新たな借金は、どうしようもなくすることもあれば、「どうしてもこれだけは欲しい」という思いを抑えられなくなって（そんな時は頭に血が上り、後先が考えられなくなる）、買ってしまうためにもできることもある。

智子はそんな自分が嫌で、この先の人生を前向きに考えられなくなってきたのだった。

——どうして自分はこんなにもだらしないのだろう。いい年をして、貯金は一銭もないのに借金ばかりが膨らんでいく。

こんな自分が結婚などできるわけがない。

幸せになど、なれるわけがない。

「先生、私は幸せになれるのでしょうか」

智子のすがりつくような声にも、占い師は淡々と再度タロットカードを切ると、今度は何枚かを横一列に並べ、

「大丈夫。今の借金は五年後にはきれいになくなっています。でも来年、また大きな買い物をしないようにしてください。せっかく楽になっても、元の木阿弥ですよ」

そして智子をじっと見た。

スタンドの明かりのせいか、その目は黒ではなく明るい茶褐色に

見えた。それがきらきらと光っている。天井から吊るされた惑星のモビールのように。

彼女の顔はやや丸顔で、白い肌に小作りの目鼻立ちは愛嬌があり、美人といえなくもない。緩くウェーブした黒髪は、レース編みの黒のストールをまとった肩先で広がり、柔らかそうな印象である。

と、占い師は、にっこり微笑んだ。

ぷつくらと艶のある赤い唇の横に小さなえくぼができ、それは最初のそっけなさとはまったく無縁のものである。

「ねえ、あなたはお金が好き？ お金を汚いものだと思っていまsekんか？」

「えっ……思っているかも……しれません」

智子はお金に走る人間が大嫌いだ。お金は人を墮落させるとも思っている。何でもお金で解決しようとする人間や、「金ですべてが買える」と豪語する人間は、この世で一番醜いと確信している。

「お金に復讐されているみたいね。あなたがお金を目の仇にしているから」

そう言って、占い師はうふふと嫌味なく笑った。

（お金が復讐？ 目の仇にしている？）

戸惑う智子に、女占い師はさらに言う。

「お金は、お金が好きな人のところに集まるの。だからお金持ちは、よりお金持ちになるようになっていくのよ。お金のおかげで人は欲しいものを買えるし、美味しいものも食べられる。お金は本来、人

を幸せにするものよ。残念ながら、それを遣う人の心によってずいぶん変わってしまうけど、でも正しく遣われれば、これほど人を幸福にするものはないんじゃない？」

なるほど、そう言われればそのような気もする。というか、正論だ。

「あなたはカードが好きなんでしょう。カードは何枚も持つのに、現金は持たない。それでは財布の中は『お金のパワーゼロ』ということになるわ。すぐにカードは財布から抜くことね。そして徐々にカードを減らすといいわ。逆に硬貨は入れておくこと。五百円玉なんか、とてもパワーが強いのよ」

そういえば五百円玉は、智子の財布からいつもすぐなくなる。真っ先に遣ってしまうのが、五百円玉だ。

「感謝すること」

占い師は言った。

「お金は人を幸せにすると信じること――じつはあなたの前世に、高利貸しだった人がいるのがカードに出ています。ほら、これ。天秤を持っているでしょう？ あなたは人にお金を貸して富を得ただけど、そのことを後悔していたの。だから現世では罪滅ぼしの意識が働いて借金してしまうのかもね。なぜ後悔するのかしら？ あなたの貸してあげたお金で、多くの人が救われたのに」

一瞬にして、智子の心から黒雲が吹き消えたようだった。まさに雨上がりの空、まばゆい光が天から射し込むように、自分の未来が明るく晴れていくイメージがはっきりと心に浮かんた。

「先生、ありがとうございます。私、お金を大切にして、お金に好かれるようにします」

占いで借金が減ることは現実にはあり得ない。

しかしこれからの希望をもらった。

智子は短い挨拶だけで部屋を出て、ふっと一息ついた後、振り返ってドアを見た。

入る時には、まるで安酒を飲ませるスナックの扉のような汚れた木のドアに、一輪の深紅の薔薇の造花と銀色のドアベルだけしか目に入らなかったのだが、今智子は改めて、ピンク色のボードに水色で書かれた先がはねあがるような手書きのその文字を、ゆっくりと目で読んだ。

——『ミステイ・ローズ』

第二話 静江

チリリン、と透き通ったベルの音を響かせて、静江は恐る恐る入っていった。

占いなんて、生まれて初めてだ。

ほんとうは、ひとりで来るにはものすごく勇気が要ったのだ。

だけどこの悩みは、まだ誰にも言っていない……言えるわけがない。

『ミステイ・ローズ』というドアの名前から想像したとおり、まだ若い女の占い師が黒いクロスを敷いたテーブルの向こう側に座っていた。

薄いピンク色のブラウスの上に、黒いレース網のショールを羽織っている。

そのショールについているスワロスキーの玉が、白熱球をきらりと反射させた。

「どうぞ」

占い師は右手のひらを向けて、静江に着席を促す。笑顔はない。

（こういう時は、『いらっしゃいませ』って言うものじゃないの？
なんか、偉そうで嫌だなあ……）

少し慚然としながら、静江は手に持ったヴィトンの大きな紙袋をまず右手の椅子に置くと、自分は左側の椅子に掛けた。

「生年月日だけおっしゃってください」

(ちょっと待ってよ、いきなり?)

まだ話す体勢になっていない。

「え……っと。せんきゅうひゃく……」思考をフル回転させる。「

……1986年4月28日」

「お悩みは？」

頭のエンジンがブンブン言って、うるさい。

「かつ、彼とのこと」

「じゃあ、彼の生年月日も言ってください」

とたんに心拍数が倍になった。

——言わなきゃダメ? ……そんなの当たり前じゃん。占いに来たんだから。

静江は自問自答で心を決めると、強気を起こして言った。

「1963年8月3日」

が、占い師は顔も上げなかった。またスラスラと紙に書き留め、二人の誕生日から別の数字を割り出したようだった。そしてふいに静江の顔を見、

「この人は、独身？」
と聞いた。

静江の中で罪悪感がうずく。

「——いいえ。違います」

八木弘。今年四十五歳。二児のパパ。

彼は会社の上司である。

長い時間、同じ仕事を共有することによって、二人の間には急速に愛が芽生えていったのである。もう何度もホテルの一室で体を重ねている――こんなことは、友達にだって言えなかった。

だが占い師は「そうかあ」と言ったきり、タロットカードの束を掴むと手際よく切り始めた。

不倫なんて、世間ではよくあること。

占い師にしてみれば、何てこともない、ただの相談事なのかもしれない。

だが、まだ二十歳そこそこの静江にとっては大問題なのであった。まさか、こんな父の年齢に近いような男性に、処女を捧げることになるうとは夢にも思わなかった……。

どちらかというと言童顔の占い師は、タロットカードを並べつつ、顔に似合わぬハスキーな声でしゃべり出している。

その声は思ったよりも温かで、最初のぶっきらぼうともいえた印象を、静江は忘れつつあった。

「あなたはねえ、とてもロマンチストなところがあるわ。本当は現実主義なのに、小説や映画のような恋愛にあこがれて、ついつい甘い罠にはまってしまいがちよ。プライドも高くって人を警戒するくせに、ふとしたことで心を全部許してしまい、コロリとだまされるの。苦勞して稼いだお金を好きな男性に貢いで、最後には全部持っていかれるわ。注意してね」

八木もそうなのだろうか。

私は、最後にはだまされるのだろうか。

占い師の指が、ひらりひらりとカードをめくってゆく。

そのカードには、綺麗だがどこことなく魔術的なにおいのする絵が描かれていて、静江の興味を引いた。

ヤギの頭をした怪物の前に、二人の男女が鎖で繋がれている絵。冠を被った金髪の女性が赤い椅子にどっしりと腰掛け、足元に稲穂が揺れている絵。

それから、崖っぷちに描かれた若者と、その足元で吼える犬。

四枚目にめくられた絵には、怖い顔をして片手に剣を持った女性が、天秤を掲げている。

最初の三枚は、静江の位置から見て逆さまで、最後のカードはこちらを向いているのであった。

ミスティ・ローズ（それが占い師の名前だとしたら）は、それからまた何枚かを次々とめくり、途中しばし考える様子を見せながら、これが最後と思われる一枚をめくった。

そのカードは一見したところよさそうな――バトンを持った裸の女性を緑の葉が囲み、四隅に動物が描かれているカードであった。それは静江から見て、こちら向きである。

「綺麗なカードですね」

思わずうきうきと言った。

「これ、いいカードなんですか？」

しかしミスティ・ローズは、「うーん」と唸ると上目遣いに静江を見、小首をかしげた。

「いいカードなんだけど、でも私から見て逆位置になるの。残念なから」

とたんに我が身がこわばるのを静江は感じていた。

（聞きたくない——嫌な結果なんか！）

「彼は優しい人ね。だから臆病なの。人を傷つけるのも、自分が傷つくのも嫌なのよ」

ミスティ・ローズは指を組み、ふうっと優しい息をつく。

「別れた方がいいと思うわ」

その言葉は死刑宣告のように静江の胸をぐさりと刺し、電気が流れたみたいに頭をしびれさせた。

彼のはにかんだような笑顔が浮かび、静江は咄嗟に、（彼を失うなんて、できない！）と思ったのである。

——彼を失うことは、世界を失うこと。そんなこと、絶対にできない。

「あなたはとても彼を愛しているのね……ほら、この冠を被った女性はあるよ。愛に満たされているの。でも一方で悪魔が出ているわ。これは邪な愛、奪ってでも自分のものにしたいという自分勝手な妄想にとらわれているの。あなたのことを、『止まり木』としか考えていない彼は、だから戸惑っているわ。あなたの愛情の深さにうろたえ始めている……」

そしてミスティ・ローズはふっと目を上げて、唇を噛む静江を真剣な眼差しで見つめた。

「彼は離婚なんてしないよ。気持ちの弱い彼には、家庭以外にほっ

とできる居場所が必要だったただけなの。責任という重い荷物を下して、ほっとできる場所が」

そう、「妻と離婚を考えている」とか、「静江と結婚したい」とか、彼がそんなことを口にしたことは一度もない。

かといって、静江の方から彼に、自分のことをどう考えているのか聞くのも怖かった。

「私——彼に出会ったのは間違いだったのでしょうか？」

握り締めた拳の上に、ぽとりと涙が落ちた。

「間違いじゃないの。お互いに必要だったから出会った。お互にとって、そういう時期だったのよ」

そう言うと、彼女はまたしなやかにタロットカードを切る。ささっと並べ、にっこりした。

「あなたには三年後、素敵な相手が現れます。その人と次の年に結婚をして、二年後に子供が生まれるわ。……うん、大丈夫。多少の喧嘩はあるけれど、幸せに暮らせるでしょう。同じ年ぐらいの、とても家庭的な男性よ。この人は逃しちゃダメだからね」

だが静江は半信半疑だった。

（三年後……？ 八木さん以外の男性？ 考えられない）

その空気を読んだかのように、ミスティ・ローズは目の前のカードをさっと集めると、より声を低くする。

「私は不倫に賛成するわけじゃない。でも好きになってしまったら、

しょうがないのよね。理屈じゃないもの。あなたがこの人を愛してしまったのも、ちゃんと意味がある。この世に生まれてきて、楽しい思い出を作るため、女としての幸せを感じるため――結ばれるかどうかなんて、今考えることじゃないわ。いい女になるレッスンをさせてもらっていると考えることよ」

「いい女になる、レッスン？」

「そう。だから『奥さんが憎い』とか、『どうして離婚してくれないの』とか思っちゃ駄目。自己嫌悪も駄目よ。彼に感謝してたくさん愛してもらいなさい。そしていつか卒業なさい」

静江の目から、またポロポロと涙がこぼれ落ちた。

「私、自分が嫌でした。彼をひとり占めしたくて、でも彼にそんな気がないのもわかっていて、だからすごく恨んで……私、今無理に別れなくていいんですね？」

ミステイ・ローズがはつきりと頷く。ショールのスワロフスキーがきらきらと揺れた。

「あなたには別に運命の人がいる。その人のために、自分を磨けばいいことよ」

今は八木以外の男性は考えられない、だがそれはそれでいいのだと、静江は何となく楽になった。

八木は離婚しない。

三年後には、自分にも運命の人が現れる。
それで十分だった。

静江は澄んだベルの音を響かせてドアを開け、ミスティ・ローズの部屋を足取りも軽く出ていった。

第三話 法子

法子は、初めての転職を考えていた。

五年間勤めた会社にはそれなりに愛着もあり、仕事にも人間関係にも特に不服があるわけではなかったが、このまま「なあなあ」になるのが嫌だったのだ。

ずっと事務員として書類と向き合ってきた彼女が次に「やってみたい」と選んだのは、エステティシヤンの仕事だった。

いつも仕事の行き帰りに気になっていたある雑居ビルの地下へ下りる階段を、今日は思い切って下りていく。

そして薄暗い廊下の一番奥の扉――重々しい木の扉には一輪の薔薇の造花と銀色のベル、そして『ミスティ・ローズ』と書かれたプレートがかかっている――を、ぐっと押し開けた。

チリリン、というたわいもない音とともに、法子は見知らぬ空間に足を踏み入れ、広いテーブルの向こうに座っている占い師に声をかけた。

「あのう……仕事の悩みを見ていただけますか？」

「どうぞ」

ピンクのブラウスに黒いショールを羽織った占い師が、右手を差し出し法子を迎える。

法子が椅子に座ると、占い師は法子の生年月日だけを尋ねた。

「1983年11月7日です」

「お仕事の悩みですね。どんな悩みですか？」

「はい。この春から転職をしたいと考えていまして……それが正し

い選択かどうか占ってください」

以前見てもらった占い師は、「勤続何年か」とか「仕事は好きか」とか、先に色々と尋ねてきたが、この占い師は一切何も聞いてこない。法子はただ黙って彼女のすることを見ていた。

部屋にはいい香りが満ちている。

ほっとする香りだ。

たいていの占い師は香を焚いて邪気を祓っている（らしい）。

マイ・ルームにこんな香りもいいな、と法子が思っていると、「あなたは頑張り屋さんね」と占い師が言った。

「ちよっと飽きっぽいけど」

自分ことながら、法子は吹き出しそうになった。

「どうしてわかるんですか？　——『おまえは飽きっぽい』って、よく親に言われます」

実際、法子が学生時代から今までに凝ったのは、スキー、スノーボード、スケート、ホウリング、ゴルフ、スキューバダイビング、ダンス……と様々である。（ダンスは、ジャズもかじってみたが、今はサルサに凝っている）

そんな自分にしては、今の会社はよく続いた方だと、自負していたのだが。

カードを並べ終え、占い師が耳障りのよいハスキーボイスで法子に質問をした。

「ふうん……どうして辞めちゃおうと思ったの？　別に悪くないわよ、今の職場。皆いい人だし、上司もあなたを評価してる。したいことでもあるのかしら？」

エステをやってみたいんです、と、とりあえず法子は言ってみた。
——人を癒してあげたくて。

占い師ミスティ・ローズは、じつと法子を見つめた。その目は思
いのほか優しく、法子は少し安心する。

「人を癒してあげたいんだ……たしかに、人に喜んでもらうのが大
好きな人だけど、でもねえ、エステティシャンは重労働よ。あなた
は体力がないから、きつと疲れちゃう。体に対して気持ちが悪回り
して、苦しいわよ。あなたは癒すより、癒されるべき人なんだけど
なあ」

「えっ？ 私が癒された方がいいんですか？」

ミスティ・ローズが胸の前で指を組むと、綺麗なピンクの爪が
るりと光をはじいた。

「そう。さっきも言ったけど、あなたは頑張り屋さんなの。だから
ぬるま湯に浸かっていると、『これでいいのかしら』って疑問が出
てくるのよね。現状維持でいいのよ。頑張りすぎないこと。それよ
りも楽しむことが、あなたには必要——趣味はあるの？」

「今はサルサをやっています」

「楽しい？」

「はい、楽しいです」

ミスティ・ローズは、そう、それはよかった、と頷くと、

「じゃあ結論を言いますね。転職はなさらないでいいと思います。
エステティシャンの勉強をして資格は取れますが、仕事としては続

きそうにありません。それよりも、今の環境に感謝しながら、楽しいと思うことをやる——そうすれば、新しいチャンスはまたやってきますよ」

と締めくくった。

本当はまだ迷っていたので、はっきりと「転職はしなくてよい」と聞いてよかったとは思うのだが、正直いったん決めた心を翻すには、まだ何か十分ではないと思う法子である。

そんな法子の心を読んだように、ミスティ・ローズが言った。

「ちょっとだけ、『魂』の話をしましょう。人は『魂』を磨くために、何度も生まれ変わってくるといふ説があるでしょう？ 私はそれを信じているわけだけど……『魂』は、ただ苦しいことを修行するためだけに生まれ変わってくるのじゃないと思うの。楽しいこと、幸せなことも経験し、刻み付けるために生まれ変わってくるのだと思うてる。あなたの生年月日から見ると、あなたは楽しむことが下手ね。あなたが飽きっぽい性格なのも、あなたの『魂』がいろんなことを楽しんでみたいからなのに、あなたは自分が楽しんだり、楽しんだりするとなぜか罪悪感を感じてしまう。だから、『もっとも』と上を目指す。そんなに自分を苦しめなくていいのよ。そんなことをしても、あなたの『魂』が幸せになるわけじゃない」

——ああ、そうなんだ……

法子は思う。

たしかにそうだ。仕事を終えても、自分だけ先に帰るのが悪いことのように思えて、つい人の仕事まで請け負ってしまう。恋人ができて、この人といつまで続くのかとそれが不安でたまらない。

「私たちはね、自分を選んできてくれた『魂』を幸せにしてあげな

くちやいけないの。そのためには、自分を認めたり、誉めてあげる
ことも必要じゃないかしら。よく頑張ったね、って」

なぜか、法子の目から涙が流れ落ちた。

——人前では絶対に泣かないのに。

それは、法子自身が一番驚くべきことだった。

——もしかしたら、もうひとりの私が泣いているのかもしれない

……

「あなたはよく頑張ってる。ご褒美にエステに行かれるといいわね」

すっきりとした気分でミステイ・ローズの部屋を出た法子は、階段を上がり青空を仰ぎ見た。

今日は土曜日。

——これからエステに行こう。

そう思ったのだった。

第四話 芳樹

芳樹がこの街を訪れたのは、初めてである。

突然、海が見たくなって、新幹線を途中下車し、在来線を乗り継いでふらりとここへ降り立ってしまったのだ。

今日は天気もよく、初めて見るこの海は穏やかで、遠くまで陽光を浴びてきらきらと輝く波を見ていると瞳が潤んでくる。

雲の間からまっすぐに射す光の帯が、まるで壮大な宗教映画のワシンのようにも思え、そこから神は降りてくるのだろうか、その空間を天使が行き来しているのではないだろうか、という何か非現実的な妄想にとらわれてしまいそうにもなる。

芳樹はそんな自分を卑しむように、ふっと笑った。

——神なんか、いない。

天気がよいとはいえ海風はさすがに冷たく、五分といられるものではない。

冬のこの時期にはどこか海の見えるレストランかカフェにでも入り、ゆっくりと眺めるべきなのはわかっていたが、今日、芳樹が唐突に感じたくなったのは、あるいはこの冷たい海風だったのかもしれないなかった。

そう、少なくとも、海に癒しを求めに来たのではないことだけは、はっきりしている。

海に背を向けた芳樹は、両手を黒いジャケットの中に突っ込み、いささか背を丸めながらレンガ造りのお洒落な店舗が並ぶアミュー

ズメント広場を歩き出していた。

この華やかな場所も、今の自分には大いに場違いである。

ショーウィンドウには一切目もくれず、彼は早足でその広場を抜けた。

通りを一本渡ると、そこはいきなりビジネス街になっており、花や賑やかな看板で装飾されたお洒落な町並みは、あたかもハリウッド映画のセットのように忽然と消え失せてしまった。

とはいっても、どのビルも大きく立派で、鏡張りの壁面や大理石の支柱がふんだんに使われ、さすが大都市と思わざるを得ない。

きつと昼ともなれば、これらのビルから大勢のサラリーマンやOLが先ほどの広場へ食事をしにあふれ出てくるのだろう。

今度は芳樹は大きなため息をついた。

と、その時、目の先に、それら立派なビルの隙間にひっそりと並ぶ、昔ながらの雑居ビルを認めたのである。

さらにその入り口に立つ看板——それは地下へと案内していたが——に目が留まった。

薄いピンクの木の看板に、赤い薔薇の花が一輪大きく描かれ、水色の文字で『占い・ミステイ・ローズ』と書かれてある。

「占い……か」

普段、芳樹は占いなど信じない。

だが今日は、なぜかそこへ行ってみようと思ったのだった。

「チリリン」とベルの音をさせて中に入った芳樹は、そこに座っていた女占い師に「どうぞ」と迎えられた。

そうして、どちらかといえば、安物のクッションを敷いただけの貧相な椅子に腰を下ろし、自分の生年月日を告げる。

「1971年6月25日……ですね」

女占い師ミスティ・ローズは、手元の紙に書き入れると、その下に「9・4・4」と書き加えた。

「で、お悩みは何でしょう？」

「私の人生——これからを教えてください。特に、仕事と家庭を」

「ご結婚されているんですね？　お子さんはいらっしゃいますか？」

「はい。二人……います」

ミスティ・ローズは、脇にあったカードを手にとるとさっと広げ、また集めていつものように切り出した。そして無作為とも思えるやり方で何枚かのカードを引いてテーブルの上に並べてゆく。

最初この部屋に入った時に、まわりがあまりに天使だらけだったので芳樹はちょっと引いていた。

（また場違いな所へ来てしまったかな）と思い、（確かに）と思い直した。

そもそも占いなんて、キャラじゃない。

だが今はそんなことも忘れて、この奇妙なカードから何がわかるのだろうかと同じと見入っていた。

——もしかしたら、とんでもない質問をしてしまったのかもしれない。俺は本当に、「これからの人生」なんかを聞きたいのだろうか？

「ちょっとお仕事、大変ですね。あなたは経営者なのかな？」

その言葉に芳樹はぎくりとした。じわりと腋わきの下に汗が浮く。

「——そのとおりです」

正直に言わざるを得ない。

ミスティ・ローズは困ったようにため息をついた。

「会社、一度整理しないといけないかもしれませんね。時期は、この春までに」

まさにそのままのことを言われ、芳樹の胃はとたんに重くなったようだった。

しかし、やはりそういう運命だったのかと変な納得もできる。

芳樹は二十六歳の時に二歳年下の彼女と予定外のでき婚をした。幸い双方の両親は認めてくれて特に不都合はなかったし、芳樹は

父の会社を継ぐことになっていたので経済的にも恵まれていたのだと思う。

だが問題は、自分に商才がなかったことだ。
三十三歳の時に父が急死し、会社を継ぐには継いだが、わずか三年で傾けてしまったのである。

今、芳樹の会社には、負債はあっても資金はほとんど底をついていた。

妻や子供たちに迷惑はかけたくない。

芳樹は昨日突然、家を出てきたのだった。ひとり、この世から消えるために。

占いは、新たなカード展開により続いている。

「春までに整理したら、次のチャンスは秋です。秋にいいお仕事の誘いが来ますよ。それはまた起業するチャンスかもしれないし、あなたに合った会社に就職が決まるということかもしれません。――夏まではしんどいけど、持ちこたえてね。それと」

ローズが上目遣いに芳樹を見た。

その目は鋭いようにも思えたが、たしかに澄んでおり、強いきrameきを宿していた。

「奥様がとても心配しておられるみたい。あなたはあまり奥様に本当のことを話さないでしょう？ でもね、奥様は話してもらいたいと思ってますよ。このカードは、『力』そして『女帝』。これはと

ても強いカードです。奥様は大きな愛情であなたを支えてくれるわ。この苦しい時期を乗り切るポイントは、奥様と力を合わせることですよ——夫婦なら、いわずもがな、ですけどね」

そこで芳樹の中から、どうにもこらえられないものが堰を切ったように噴き出した。

彼は思わず腕に伏せると「うつ」と声を殺す。熱い涙が目尻にあふれた。

ローズの低い声が優しく耳に届く。

「奥様をもっと信頼しなきゃ。家族を幸せにするんではなくて、とにも幸せになろうと思うこと。それが大事だと思うんです」

瞑った目の内に、何分か前に見た海のきらめきが甦ってくる。そしてその海に差し込む光のカーテンも。

「大丈夫。必ず今の困難は越えられます。あなたにも、奥様にも、まだまだ未来が続くのよ。感情的に動かないこと。あなたの悪い癖ですね。そして『好きなもの』を選ぶのではなく、『必要なもの』を選ぶようにしてください。人間関係には特に気を配ること。人をうまく使う術を身につけるのは、あなたの役目です。頑張って」

かっこ悪い、と恥らいながら、芳樹は涙を拭き、顔を上げると鼻声になりながら言った。

「……本当は死ぬつもりでこの街に来ました、妻にも黙って。事業資金もなくなり、妻や子を幸せにしてあげられない、そんな自分には生きている価値はないと。誰かに聞いて欲しかったんです。——

ありがとうございます。楽になりました」

「奥様に今すぐ電話、してあげてくださいね。そしていつかまた、奥様と一緒にこの街に来てください」

頷きながら芳樹は、この次はきっと、風の音ではなく、波の音を聞きに来ようと思った。

第五話 比奈子・稔

「あつ。ここだ、ここ」

ドアベルの音とともに勢いよくドアが開き、女性の声がした。
長い真っ直ぐな黒髪、ニット帽を被っている。コートも今流行りのロングニットだ。

彼女は手を上下させ、「早く、早く」と連れを呼んでいる。

「早く来なさいよ、稔。こっち」

そうして二人はローズの部屋の中へ入って来たが、賑やかにはしゃいでいる女性に比べ、連れの男性の方はむっとりとした印象で、まだまだだった。身長が高く痩せているためひよろりとした印象で、シンプルな黒のウールジャケットのポケットに無造作に両手を突っ込んでいるせいで、どうも猫背のように映る。

対照的な二人だが、ローズは別に何とも思わなかった。

たいてい、男の子はこんなところへ好き好んでは来ないものだから。

「お願いします」

女性はそう言ってうきうきと座り、男性の腕を引っ張るようにして「ほら」と着席を促した。

その様子を見ているだけで、ローズは一言言ってやりそうになる。
——女性がそんなふうに男性をリードするものじゃありません。

ローズはいつものように、二人の生年月日を聞いた。

女性は1976年12月6日生まれ、男性は1985年5月2日
生まれということである。

ローズはタロットカードの他に、生年月日から性格やおおまかな
運勢を割り出す『数秘術』という占法も用いていた。

タロットカードは並べるまでどんな結果を引き出すか決まってい
ないが、数秘術は統計学であり、定められていることを伝えるとい
う点において安定した鑑定ができる。

果たして数秘術で見たところ、やはり二人は男女が逆の性格のよ
うだった。

ここで問題は、たとえ性格が逆でも、実際の性は無視できないと
いうことである。つまり、女の性格だからといっても実際は男なの
だからプライドを立ててあげなければならぬし、男の性格だから
といって女性らしさを失ってはマイナスなのである。

（うわ、最悪。特に、彼はプライドが高そうだわ……おまけに甘え
ん坊と出てる）

そう思いつつ、ローズは二人を交互に見、「お二人の相性を占え
ばいいのかしら？」と聞いた。最後に、つい確認をするように女性
の方に目がいつってしまったのはしょうがない。

やはり領いたのは、女性だけだった。

「はい。お願いします。初めての、年下の彼なんです」

白い顔を紅潮させ、ボンボンのついた毛糸の帽子からは年齢以上の若さを感じさせなくもないが、きりりと太く描かれた眉とやや歪んだ口元、くぼんだ頬は、やはりそれなりか。

ローズが見たところ、彼女は完全なる男星、つまり男おんなである。

超現実主義でおおざっぱ、細かいことは大嫌い。変に自信家になる時もあり、そんな時は勢いだけで突進していく。が案外その鼻は折れやすく、そうなれば、どこまでも落ち込んでゆく。挙句^{あげく}見事なマイナス志向に打つ手はなくなるのだ。

（さて、どこから話そうか）

ローズはそう考えると、ひとまずカードを手に取り始めた。そして、

「あなたには、年下の男性はぴったりですよ。あなたはお世話焼きだし、そうすることで自分の存在意義を自覚できるし、彼への愛情も深くなるの。――それから彼もね、あなたにも母性本能の強い女性が似合います」

女性はうんうんと頷いていたが、案の定、カードには男性の不満が大きく現れ、『悪魔』や『法王』の逆位置、それに『正義』の逆位置などが出てきた。

「嫌だー、怖いー、このカード。ほら、何か暗いじゃん。ミノル、どうよ？」

そうやって彼女は”ミノル”の腕にしがみつく。

「えー。どうってことないじゃん。『死神』の方が怖いですよねー」

意外にもミノルがローズに話しかけてきた。タロットについて、少々知識があるのだろうか。

ローズはにっこり笑うと、ミノルに答えてやる。

「そうね。でも『死神』が悪いカードとは限らないのよ。『死神』には終わりという意味があるけど、それは悪いことの終わりを示す場合もあるから」

「へえー、なるほど。そうなんすか。ヒナコ、そうなんだって」

ヒナコは、ミノルの腕をぱしりと叩き、

「もう。ミノルのシツタカ。すごい格好しようとするんだから」
きゃはは、と笑う。

（うっ……どうしてそこで、流せないかな？）

と、思っても言わずに、肅々（しゅくしゅく）とカードを並べてゆく。

『太陽』の逆、『恋人』の逆、『戦車』の逆。『塔』の逆に『吊るし人』の逆に『審判』の逆。

逆、逆、逆。

逆位置のオンパレードだ。

逆位置で悪い意味がかえって弱められているのもあるが、いいカードがすべて逆位置というのはいただけない。

「えーと……」

さすがにローズも言葉を探した。

が、観念して、まずは互いの性格から教えてあげることにする。

「彼は年下でも立てるべきところは立ててあげてね。なぜって、彼はとてもプライドが高いから。頭はたしかに回転が早いんだけど、『自分は間違っていない』という思いが強すぎるわ。それと、子ども扱いされるのが大嫌いよね？」

「はい」

とだけ、ミノルは答え、

「当たってるうー!!」

とヒナコは騒いだ。

「彼は本当は、自分以外にあまり興味は持てない生まれだわ。けどひとり放って置かれるのには耐えられない。彼には母性本能の強い女性がいいって言ったと思うけど、ストレスの解消には女性の愛情が不可欠なのよ」

「あっ、たしかに、母親と仲いいです」

「うっせえなあ……黙れよ、ヒナ」

ミノルの耳が赤い。

ローズは続けた。

「だからあなたも優しく彼を包んであげなくちゃ。彼の話をちゃんと聞いてあげて、『大丈夫、あなたならできる』、そう言って自信をつけてあげるの。上からガミガミはいけません。ガラスを扱うように、繊細にね」

「こいつ、そんなことしてくれません。いつもオレを馬鹿にする一方で」

突如はつきりと宣言したミノルに、ヒナコは凍りついたように動けなくなった。

それまでの笑顔は消えうせ、くぼんだ頬を微かに震わせながらミノルの横顔を凝視している。

「そんな……」

声を絞り出した。

「そんなこと、してないじゃん」

「してんじゃん」

「してない——」

「まあ、待ってちょうだい」

やっぱりこのカップルは、もうすでに壊れていたんだ、そう思いつつローズは口を挟んだ。

「本当はね、あなたたちは男女逆なのよ」

ローズはペンを取ると、二人の生年月日をなぞる。

「彼はとても繊細、女性的な感性をしているわ。でもあなたはおおざっぱで大胆で、すぐリードしたがる男星。誤解しないでね、明るくて元気なのはいいことよ。むしろあなたは、カカア天下が似合う人なの。でもあなたには致命的なことがある——それは恋愛下手なこと。単なるボーイフレンドなら楽しく付き合えるのに、彼氏となると、すぐ不安になってしまう。『自分を嫌いにならないか』『浮気しないか』『他の女の子から言い寄られないか』。悪いことばかり想像して、相手を困らせるわ」

その時、口をつぐんだままのヒナコの目から、涙がポロリと落ちた。

「実はオレたち、一週間前に別れたんです。今日はどうしてもヒナがここに来たいっていうから、一日だけ付き合っただんです」

そうだったんだ、とローズは思う。こういうカップルの来店は珍しい。

「ねえ」

ローズはヒナを下から覗き込むように姿勢を低くすると、できるだけ優しい口調で言った。

「言ったでしょ、あなたには年下の彼が合います。でもその年下の彼というのは、この彼じゃないかもしれない。あなたは『女らしい』のよ。女らしい人には、必ず男の部分がある。男らしい人には、必ず女の部分があるの。どっちが強いかといえば、肉体的には当然、男。でも精神的には女が強いわ。あなたのような男の部分を持った女らしい人が支えてあげなくちゃ」

ヒナコはただ泣きじゃくっている。

「――おまじないを教えてあげましょう。『どうにかなる、何とかになる』。思い悩んだ時、そう言ってみて。そして、明るさを失わないこと。彼氏とは言葉ではなく、スキシップでコミュニケーションすること。これを守れば、きっと幸せになれます」

ミノルが、ポンとヒナコの背中を叩いた。

「頑張れよ、ヒナ」

第六話 英美里

バレンタインは過ぎてしまった。今年も、無情にも。

学校がインフルエンザの大発生で学級閉鎖をしていた間に。

今は「情報の保護」がどうかいって、友達でもない生徒の、まして一学年上の人の住所など、わかってははずもない。

それでも英美里は、大好きな彼の誕生日がもうすぐ来ることをつきとめたのだ。

乃木宗一。1991年3月12日生まれ。

彼はM高校水泳部のホープである。

そしてどうやら、熱帯魚の飼育に凝っているらしい。

だから、ある人のアドバイスによって、芳乃はこう決めたのだった――「先輩の誕生日に、熱帯魚をプレゼントする」と。

（でも、どんな熱帯魚が好きなんだろう？）

学校の帰りに、思い切ってホームセンターの一角にある「熱帯魚コーナー」に立ち寄ってみた。

このホームセンターはよく利用するけれども、このコーナーに来たのは初めてだった。

ずらりと並んだ緑色の水槽を、ブラックライトが照らしている。

その中を悠々と泳ぐ小さな魚をのぞき込んだとたん、英美里の背筋にぞくつと悪寒が走った。

じつは英美里は、小さなものから大きなものまで”魚”と名のつくものが嫌いである。

魚の、ぬるりとした体も、目蓋のない目も、ポンプのように何でも吸い込んでしまいそうな口も、大嫌いだった。

魚の形を保っている料理もすべて苦手——お頭付きの刺身はもちろん、ちりめんじゃこや、釘煮も食べられない。

ずっと小さい頃、家族で行った旅行先の旅館で豪華に夕食を食べたとき、父がぱかっとな蓋を取った鍋の中に、白目をむいた鯛のお頭がどーんと入っていたのがいけなかったのだろうか。

その時の恐怖を、英美里は覚えている。

説明のできない恐怖ではあったが、しばらく白目の鯛が追いかけてくる悪夢に悩まされさえしたほどだった。

それ以降も度々見る、意味のない魚の夢……

暗い縁の下に植木鉢が並んでいて、そこにはひとつひとつ鯛のお頭が刺さっていたり、サメやエイがうようよ泳ぐ海に落ちたり。

夢の中で見る魚たちの巨大さといったら、身震いせずにはいられない。

だが何より、目覚めてからも鮮烈に頭に残っているのは、あの目蓋のない不気味にギョロつく”目”なのであった。

（熱帯魚は大丈夫……綺麗だもん）

ひらひらと、目の前の熱帯魚の赤い筋の入った白い胸びれと尾びれが優雅に舞うのを眺めながら、英美里は自分にそう言い聞かせ、にっこりと微笑もうとした。

と、ふと横の水槽を見てしまったのである。

——『アマゾン産ナマズ ゼブラ・キャット』

(ひゃあああ……)

どうにか声を上げずにはすんだ。

だがもうそれ以上店にはいられず、口を押さえたまま、英美里は慌ててホームセンターを飛び出した。

その晩、ネットで「熱帯魚」を調べてみたら、熱帯魚にも色々と相性があることがわかった。

「そうかあ、一緒にすると、食べられちゃうこともあるんだ」
これでは迂闊にプレゼントできない。

まずは、彼の飼っている熱帯魚の種類を把握しないと。

英美里は自分が彼の前に立って質問しているところを想像してみた。

——あの、どんな熱帯魚を飼っているんですか？

「……駄目だ。聞く勇気なんて、ない」

そうすると、どんな魚とも上手くやれる種類を選択するしかない。

今度あの店の店員さんに聞いてみよう、そう思いつつ、また検索する。

パ！ とまるで絵画のような水槽の画像が飛び込んできた。

「——アクアリウム・コンテスト？　へええ、水槽のコンテストなのか、あるんだ」

それは熱帯魚の水槽をそれぞれ自分の世界観に合わせてアレンジしたコンテストで、水草や藻などが本物の森のように茂り、その中をまるでファンタジーの世界のように色とりどりの熱帯魚が泳いでいるのだが、コンテストは参加者が送ってきた写真によってされるらしく、そのときの魚たちの泳ぐタイミングや藻の感じなど全体のバランスが重要なポイントとなるようだ。

もしかしたら、彼もこういうのを目指しているんだろうか。

その夜、Googleに引っかけた項目を片っ端からクリックして、時には大寫しになった魚の画像に悲鳴を上げ即座に閉じたり、目をそらしたりしながら、英美里はけなげに検索を続けた。

「それでしたら、コラドリスなんかがいんじゃないですか？ 他の魚の食べ残しを食べて、水槽を掃除してくれますし」

英美里はまたホームセンターに来ていた。そして勇気を出して店員に聞いてみたのだが。

そのコラ……何とかいう魚は、顔の先が突き出っていて、気持ち悪くてとてもまともに見られなかった。

（こんなの、持っていけないや）

「えっ……と。他には」

「うーん、他には、プレコとか。コケを食べます」

（きゃーっ、何て気持ち悪いんだ！ 黒い点々なんてっ）

「あの。もっと可愛いありませんか？ もっとフツウの……」

「あ、だったら、これどうです？ グラミー。可愛いでしょ？」

（可愛いけど——ちょっと違う）

グラミーは、自分の思いを伝えたいのとイメージが違う気がした。

「あとはどんながありますか」

こうなったら、納得がいくまで聞いてみようと思った。

本当はあんまり長居はしたくないし、奥の水槽には行きたくないけど……。

「あっ、いいのがあります。こちらへ」

店員が手を打って、英美里を奥へ招く。

——嫌な予感がする。

頭の高さに横長の大きな水槽が出現した。そしてその水槽には。

「すみませえん、また来ますうう……！」

とても耐えられなかった。

ピラニアもどきの大群が、ギョロ目をぎらつかせていたのである。

英美里はため息をついて、ショッピングビルに入っていた。

今日は土曜日。人が多い。

（あれだけでとても疲れてしまった。缶コーヒーでも飲もう……）

そう思って自販機を探しながらふと目をやったとき——

それは見つかった。

3月12日。

英美里は、乃木宗一を水泳部の部室の横で待ち伏せ、ついに苦心して選んだプレゼントを渡した。

やっぱりひとりでは心細かったので、親友のみずほと一緒にいてもらったが、最初驚いたような乃木宗一が、英美里からプレゼントを受け取るとはに cand 「ありがとう」と言ってくれたことに、二人は抱き合って喜んだことだった。

そして、二日後の金曜日、乃木宗一が英美里の教室を訪ねてきたとき、クラスの女子は騒然となり、英美里は頭が沸騰した。

お礼の手紙と共に、彼のメールアドレスが添えてあるのを見た英美里とみずほは、思わず抱き合うと笑い泣きする。

みずほが言った。

「明日、行く？ 報告にさ」

英美里もうなずき、

「うん、行こう」

そして付け加える。

「ついでに、これからのことも占ってもらわなきゃ」

チリリン、とドアが開き、「こんにちは！」という明るい声で二人の少女が飛び込んできた。

ローズは顔を上げると、にっこりして「こんにちは」と挨拶を返

す。

もちろんローズも二人を覚えていた。

二人の少女——英美里とみずほはローズの前に座ると、「先生、お世話になりました！ 無事、彼氏と付き合えるようになりました！」と報告した。

頬を紅潮させて、英美里が言う。

「先生のアドバイスどおりにしたら、ほら、彼こんな手紙くれたんです」

——スカーレット、サンキュ。これから一緒に育てていこうな。

俺のメール↓soichii-fish@xxweb.ne.jp

「スカーレット？」

ローズが首をかしげて英美里を見ると、英美里はみずほと目を合わせ、持っていた手提げ袋からあるものを取り出した。それをゆつくりとテーブルの上に置く。

それは直径が10センチほどのドーム型のアクリルケースだったが、どうやら水槽になっているようである。

中には枝のような赤紫色をした水草と、真っ赤な——そう、スカーレット緋色の、本当に小さな小さなエビが三匹、ゆらゆらと浮かんでいた。

「まあ、これ、エビ？ 可愛い」

「『ホロホロ』っていうんです。で、『スカーレット・シュリンプ』っていうのが、このエビの正式名称みたいで」

「これをあげたのね」

「はい。で、自分にも買っちゃいました。先生が、彼の好きなものには興味を持つように、って言うてくださったから」

ローズは自分のことのように手を打つと、

「すごい、よかったわね。上手くいって」

そして、

「彼は自分の世界を持つタイプ。このゆらゆら感は、ぴったりね…
…ああ癒されるう、私も欲しくなっちゃった」
と笑った。

第七話 芳乃

——どうしよう。何を着て行けばいいのかわからない。

「やだ。もうこんな時間……もう、何でもいい！」

長い間ドレスサーの前で迷っていた芳乃は、とにかくボウの付いたクリーム色のワンピースを掴むと、取り外したハンガーをベッドの上に放り投げた。

急いで着込むと背中ของファスナーを上げ、また鏡を覗く。ボウを首元でクロスさせると、きらきら光る小さなピンでその中央を留めた。

「うっ……髪が」

バランスが悪い。アップかポニーテールにしまきゃ。

迷わずブラシを入れるとひとつにまとめ、高い位置に持っていく。左右を確かめ、手早くゴムで結んだ。

今日、芳乃は、初めてお見合いをするのだ。

お見合いだから、あまり派手ではいけないが、地味でもだめだ。若く見え過ぎても、老けて見えても、いけない。その加減がむづかしい。

芳乃は今年二十九、ぎりぎりのライン。

（私が二十歳の頃、二十九なんて、完璧オバサンだったのに）

仲良し三人組は、うち一人が結婚しているけれど芳乃は全然焦ってはいなかった。ただ両親が心配するのだ。

それに、まあ、子供は産んでみたいと思うし。

そういうとき、この見合い話ってきた。

いつも訪問してくれる、S生命保険会社の中江さんが持ってきたのだ。

「芳乃、まだなの？ お父さん、もう車出してるわよ」

「はあい、今行く」

——そう、芳乃だけではない、父も母も全然落ち着きがなくなつて、いつもと違う日曜になっていた。

「大変だねエ、お見合いも」

妹の眞子が部屋を覗いて、くくくつと笑い、「何か手伝おっか？」と、ちらかったカバンやらをよけながら入ってきた。

いつもなら、ラブラブの彼氏がいるような妹の皮肉を黙って聞き過ごす芳乃ではないが、今は生憎と余裕がない。

「助かる。このリボン、結んで」

だが眞子はそのリボンを見るや、

「えーっ、それ？ 子供っぽい」

ドレッサーの引出しを探つて、以前芳乃が買ったものの上手く使えずに放りっぱなしにしていた夜会巻きコームを取り出した。

白いパールもどきが一行に並んでいる、上品なコームだ。

眞子はさっさと芳乃の髪を解くと、夜会巻きコームで髪をすくい、器用にねじって頭に留めた。指先で後れ毛を散らすことも忘れない。

「ほら、これでいい。完璧でしょ」

「わっ、眞子ったら、器用ね。――ありがとう」

窓の下から、「芳乃ー」という母の声が聞こえる。

芳乃はシャネルの白いハンドバッグを掴むと、部屋を走り出た。

普段は自転車で飛ばす道を車で送ってもらい、駅で降りる。

――やれやれ、本当に今日は特別な日だ。

車の中で、父は何も言わなかったが、降り際に一言、「頑張れよ」と言った。

「何を頑張るのよ」

そう言いながらドアを閉めたものの、（頑張らなきゃ）電車に乗った芳乃はそうつぶやいていた。

目的地に着いてターミナルビルの前で辺りを探す。

「芳乃ちゃん」

中江さんが手を振ってくれた。

「素敵ねえ」

近づいていくと彼女はそう言って芳乃の手を取り、

「こっちよ。あー、どきどきするわね」

まるで自分のことのように胸に手を当てた。

それから一週間後。

芳乃は定時になるや仕事場を出、走って、同僚の法子に教えられた占い師のところへ向かっていた。

今まで気にもかけなかったというのに、一輪の赤い薔薇の花と水色の文字で『占い・ミステイ・ローズ』と書かれた薄いピンクの看板を即座に見つけ、階段を下りてゆく。そして薄暗い廊下の一番禺の扉を、そこに『ミステイ・ローズ』と書かれたプレートがかかっているのを確かめながら、ぐっと押し開けた。

「こんにちは」

エスニックな香りの中、自分の声が頼りなく響き、座っていた占い師がふっと顔を上げた。

「こんにちは。どうぞ」

お愛想の笑顔一つなく、特に感情の感じられない声で返された芳乃は、（まるで病院のようだ）と無然と思う。

（病院……でも今の私には必要なのだ）

そう思い、ローズの前の椅子に腰を下した。

黒い布のかけられたテーブルの上には、ガラス細工の天使が乗っている。

デパートの贈答品売り場で見る高級なガラス細工——たしか、スワロフスキーだ。

輪っかの部分にはめ込まれた金が、明るい黄色に輝き、芳乃の目を射た。

「お悩みは？」

とローズが聞く。薄いブルーのブラウスに、黒い網のシヨール。やっぱりスワロフスキーがついていて、（こういう世界に光物は

つきもののね」と変に納得せざるを得ない。

芳乃は、まだ荒い息を整えながら話し出した。

「あの……先日お見合いをした人との相性を見てください。私にとって、運命の人なのかどうか」

——『運命の人』！　なんて少女チックな言い方だろう。私ったら、いい年をして恥ずかしい……。

勝手にひとり赤くなってうつむく芳乃に、ローズは二人の生年月日を聞いた。

そして例の如く数字を計算し、カードを広げる。

芳乃は昔、手相やら四柱推命で人生を占ってもらったことはあるが、タロットは初めてだった。

けばけばしいともいえる絵がずらっと目の前に並び、冷静になってくると不安になった。

（こんなカードで何がわかるのかしら）

「うーん。残念ながら、あなたはこの方のこと、女性としては好きにはなれないでしょうね。ぐつとくるものがないというか。一緒にいて、どきどきしたり楽しいとは感じないでしょう。——それに、『死神』が出てるわ、逆位置だけど。『フル』もね。もしかして、忘れられない人がいる？」

芳乃はどきりとした。非常に驚いた。

そう、芳乃には忘れられない元彼がいたのである——真也。どう

しようもない、身勝手なヤツ。

「います……でももう別れて二年にもなるんです。忘れようと思って、もう忘れて結婚しようと思ってお見合いをしたんです」

「やっぱりそうなのね。その彼の生年月日を覚えてる？」

「はい。1978年3月25日です」

ローズは、『1979・7・1』『1977・12・3』と書かれた下に、『1978・3・25』と付け加えた。そしてまた計算し、「うーん」と唸って顔を上げた。

「かなり振り回されたでしょう。あなたと彼じゃ、何もかもが違い過ぎてたわよ。まあ、変なところで盛り上がるでしょうけど」

ペンをコツコツいわせ、ローズは続ける。

「あなたは予定通り行きたがる現実主義、反対に彼は自由気ままな感覚人間。でもどちらも相当な頑固者ね。何にしろ、彼には彼独特の価値観があるから、人の話なんて聞かなかったでしょ」

「あっ、そう。そうでした」

その間にもローズはカードを手早く切り、新たにテーブルの上に並べ直した。そして、芳乃が一番知りたかったことを告げた――

「彼はもうあなたのことは怒っていない。懐かしく思っています。でも今後、お二人の縁が重なることはないでしょう」

思わず芳乃の瞳から涙が零れ落ちる。

なぜ泣くの？ そんなこと、わかっていたはずでしょう？

「でも、あなたがどうしても彼とよりを戻したいと思うなら、この夏がチャンスです。あなたの誕生日の少し前に、『お久しぶり』メールでもしてみたらどう？　ただし、もし上手く戻れても、また以前と同じことで喧嘩にはなりやすいから注意してね——結局、彼は変わらないから」

今まで追い払おうとしていた真也の面影を、今芳乃は一瞬で取り戻し、もっと、もっと、細部まで思い起こそうとしていた。濃い眉、ちよっと曲がった鼻、男の癖に長い睫毛に綺麗な二重の目、そして皮肉っぽく笑う口元——。

だがローズは、芳乃を説得するような目で見つめた。

「あなたには結婚に対する情熱がどのくらいあるかしら？　このお見合いの方はいい相手よ。ほんとはこちらの方が安心な人生を送れます。真っ直ぐで融通がきかなくて、すぐく不器用なところがあるけれど、責任感もあるし誠実だわ。結婚するならこういう人が、冒険嫌いなあなたにはぴったりの。だからよく考えてね。私のカードでは——」

そこで少し言葉を切る。

「私のカードでは、残念ながら結婚にはならないと出ているけど。あなたの結婚はまだ五年先かな」

芳乃は思わず声を張り上げてしまった。

「五年?!　五年も先なんですか?」

「ええ。でも未来は変えられる、あなたが決断すれば。あなたが今この方を選んで結婚しようと思えばそうなるし、でも昔の彼をもう一度選ぶなら、この結婚は当然なくなる。そして元彼とゴールインできるかどうか、あなた次第」

そんなの占いの意味ないじゃない、そう言いたげな芳乃の顔。
ローズは見抜いたようだった。

「私は占い師やってるけど、あくまで決めるのは自分だと思ってる。だって自分の人生じゃない？ アドバイスをして背中を押してあげるのが私の役目なの。――でもあえて言う、自分に嘘をついたらきつと後悔する。あなたは五年後、結婚するチャンスがある。だから今は、本当に好きな人に気持ちを伝えてみてはどう？」

ミステイ・ローズの部屋を出ると、辺りはもうすっかり暗かった。それでも夜気はすがすがしい。

（冒険嫌い……か）

そのとおりだと思った。

芳乃はもう一度、”冒険嫌い”の自分の性格と、”結婚に対する自分の情熱の大きさ”をよく考えてみようと思いつながら、まるく満ちつつある月を眺めた。

第八話 美咲

初めてのひとり暮らしに、美咲のテンションは上がりっぱなしだ。
(完璧なものにしなきゃ)

この数日、風水の本を片手に生活している。

美咲は三十四歳。

いわゆる、バツイチであり、二十八歳で出戻ってからずっと、実家で窮屈な思いをしていた。いまや両親とも、ほとんど会話らしい会話は無い。

結婚してわずか三ヶ月で、自分が結婚に向かないのを知った。

——毎日毎日面白くもない家事をやって、旦那のいいなりになるなんて、馬鹿みたい。私の人生なのに。

それでも三年我慢し、義母から「美咲さん、子供作る気ないの？ 照男が可哀相じゃない」と面と向かって言われたことをきっかけに、離婚に踏み切った。

後悔はしていない。

美咲はローズの店の常連であった。

今日は何軒かの賃貸住宅物件のコピーを持参してきていた。

「この四軒のうち、いいのがありますか？」
「ふうん、どれどれ」

ローズはそれを受け取り、早速カードに聞いてみる。

まず、一軒目。

「『塔』の逆、『太陽』の逆、『隠者』……か。何か日当たり悪そうだね」

「先生、ビンゴ！ でも、新築だし、捨てがたいんです。どっちみち昼間は仕事でいないしね」

「洗濯物は？」

「そんなの！ 乾燥機使いますから」

「あっそ。でも、太陽の射さない部屋は運氣もよくないよ。よほどまめに掃除しなきゃ。美咲さん、できる？」

美咲はぺろりと舌を出す。

「じゃあ、次行こうか。……『戦車』の逆、『女帝』の逆、『月』。これはどうみても、隣近所か大家さんの問題で悩みそうだね。それか、あまり女性がひとりで住む環境じゃないのかも」

美咲は「うーん」と唸って上を向いた。

「確かにS町だから……柄はよくないか。でも、安いですよー」

「安全には代えられないよ、この時代」

ローズがぼしりと言うと、「そーか」と言っただけでうつつむいた。

「とりあえず次行くな。三軒目。えっと、『マジシャン』、『フル』、『節制』……うん、これはいいんじゃない？……あっと、『吊るし人』。ちょっと会社から遠い？」

「え。そうでもないですけど。実家もすぐ近くだし」

それを聞いてローズは大きく頷く。

「それだ、美咲さん。きつと、お母様がしょっちゅう訪ねてくるわよ」

美咲は大きく右手を振った。

「それはないですよー。だって母さんとはもうあまり会話もないんですよ。きっと私が出て行って、せいせいしますって」

「それは違うわよ。お母様、美咲さんのこと、大好きだと思うわよ」

「まあそう言えば」美咲の視線が宙を漂う。

「昔は、一緒に買い物に行こうってうるさくて。私が嫌がるものだから、最近は言わなくなったけど」

「親との思いでは、今のうちに作っておくべきよ」ローズがしみじみと言うのは、珍しいことだ。

「『親孝行、したいときには親はなし』って。あれ、本当よ……ま、いいか。次、最後のは」

そのとき、「チリリン」とベルの音が響き、ドアがぎぎっと開いた。

四十歳くらいの銀縁のメガネをかけた男性が顔だけのぞかせてローズを見ると、人差し指を一本立て、すぐにドアを閉めた。

美咲はローズが頷いたのを見た。

（きっと先生の知り合いだ。上にいるっていう意味なんだ）
このビルの一階には、スタバが入っている。

「先生、このあと、デート？ いいなあ」

「いやね、そんなんじゃないわ」

言いながら、目元が赤い。

「で、最後のはね……」

無理に話を戻そうとするのも、怪しい。

「『力』、『正義』、『審判』の逆——吉凶混合ね。『星』も出てきたわよ、逆だけど」

「結構人気の物件みたいです。滅多に空かないって」

「あつ、じゃあ急いだ方がいいわ。もう誰かに借りられてるかも」

「えっ。ならすぐ電話します。——ここが一番いいですか？」

「そうね。このこと、三番目のが、おすすめ」

「わかりました。じゃ、電話、いいですか？」

「どうぞ」

不動産屋に携帯で電話を始めた美咲の前に、ローズは部屋の時計をちらりと見た。

——もう少し、待ってもらおう。

「あつ、もしもし。私、二週間前にうかがった近田です。あのN通りの物件ですが……えっ？ ああ、やっぱり」

そのトーンの落とし方から、すでに先約が入ってしまったことがわかる。

（二週間前？　だめでしょ、そりゃ）

美咲が大げさに残念がっているのに申し訳ないが、ローズは美咲らしいと思い、思わず苦笑した。

美咲はちっとも学ばない。

いつもそのときばったりの人だ。

彼女の霊数の人はたいていそうだが、考えるということをしてない。

常に直感や感覚で動いているのだ。

結婚も、本来は合わない。三年続いただけでもたいしたものだ、とローズは思っていた。

——。だけど、彼女はまた結婚するだろう。何しろ、学ばないんだから

その瞬間瞬間、真剣で、きっと恋をしたらまた結婚してしまうだろう。

純粹で、寂しがり屋の霊数だから。

「あー、やっぱりだめだった。もう決まってました。先生、ビンゴ」「ビンゴじゃないわよ。当たり前よ、二週間も前なもの。ちょうど、引越しのシーズンだし」

「あっ、そうか……うっかりしました」

——やれやれ。

「三番目のに決めれば？　美咲さん、寂しがり屋さんなんだし、実家に近い方がいいって。そして親孝行のことも考えてみて。何も特別なことなんてしなくていいから。ただ、声をかけてあげるだけで嬉しいんじゃないかしら。お母様とは時々一緒にショッピングでもしてね」

「うーん……考えてみます」

そのとき、ふわっと美咲の後ろに眼鏡をかけ、白髪混じりの髪にパーマをあてた女性の姿が見えた。

「お母様かな……？ 美咲さんの後ろにいて、とても心配してまよ。美咲さんのお母様って、何もかも、すべて自分で背負おうとしていらっしゃるのね。——もしかして、お父様どこか悪いんじゃないかしら」
「えっ？」

美咲がぎくりと顔をこわばらせた。「父さんが……」

「ちょっと健康状態がすぐれないと思いますよ。お母様、美咲さんにも助けて欲しいんじゃないかな……それとなく、聞いてみて。それから、松の木が見えます。庭に松の木がある？」

「あります。父が世話している——松の木」

「お父様はその松の木をととても心配してるみたい。手入れを手伝ってあげたらどうか」

「嫌がるんです、他の人にまかせるのを。頑固だから」

「そう……。でもお父様がその松の木をととても大切にしていられ、やることだけは、忘れないであげてね」

とたんにしょんぼりと肩を落とすと、美咲は消え入りそうな声でつぶやいた。

「私——家を出るなんて——親不孝ですね。やめたほうがいいのかな」

しかしローズは明るく、力強く言った。

「ううん、やめなくていいのよ。あなたは自分が思うように生きていい人なの。家を出て、ひとり暮らしを始めればいい。でも、ご両親の思いも感じてあげる必要はあるわね。親孝行なんて、たとえば地球の裏側にいてもやろうと思えばできるんだから」

美咲はパツと笑顔になり、「わかりました。じゃあ三番目の物件にします」、「そう言うのと立ち上がった。

——そうそう、それでいい。切り替えが早い。さすが霊数8。

「頑張ってね」

優しく言った。

心はすでに自分のことに向いている。

——そう、頑張らなきゃ、千登勢。

第九話 千登勢

午後七時三十分。

鑑定を終えたローズは、すべての指輪と黒いショールをはずし、代わりにパールがひとつだけ付いた銀のリングと春物のジャケットを羽織って、部屋の明かりを消した。

荷物を持つと部屋を出て鍵をかける。

さあ、これからは”ローズ”ではなく、”榊原千登勢”に戻る時間だ。

一階のスターバックスに入ると、真っ先に彼——横川リュウジの姿を捜す。

彼は奥まった長ソファの喫煙席で、雑誌を見ながらコーヒーを飲んでいた。灰皿から薄く煙が上がっている。

白いシャツの上にアルマーニの藍色のジャケットを着、足を組んでいるところは、五十過ぎには見えない。

千登勢はふっと笑った。

なかなかダンディじゃない。

リュウジはひとりの時間を上手く過ごせる人なのだ——言いかければ、待たせる方に安心感を与えてくれる人。

こうやって、コーヒーを飲みながらゆっくり待っていてくれると、心底ほっとするものだ。

「リュウちゃん、お待たせ」

「おう」

「ご苦労さん、と言いながら、彼は体を少し左へずらして千登勢を座らせた。」

「たばこの嫌いな千登勢も、不思議と彼の吸うたばこの煙だけは気にならない。どころか、彼の体から上がるキャスターの香りが好きだった。」

「まあ一杯飲むか」

「ううん、いい。出ましょ」

リュウジはメガネの下からにと、意地悪そうに笑った。

「お、覚悟ができてると見える」

「意地悪」

今日、千登勢は、初めてリュウジの娘に会うのだった。

横川リュウジと出会ったのは去年の秋、古書の販売会場で偶然同じコーナーにいたのがきっかけで、彼の方から声をかけてきたのであった。

ずっと立ちんぼうで本の壁の間をうろついていた千登勢は、だからつい、誘われたコーヒーに飛びついてしまった。とはいえ、大きな古時計のある喫茶店で意気投合し、その後数回食事を共にしたあと男女の関係になったことを今振り返ってみると、あれも運命だったといえるのかもしれない。

リュウジには、別れた妻との間に子供があった。

今年から高校生になる里穂^{りほ}という女の子で、少し体が弱いらしかった。

リュウジは得意げに、いつも持ち歩いているという小さな革の写真入れに納まった彼女の写真を見せてくれ、

「どう？　可愛いだろう？　左側は二歳のとき。で、今が右側だ」
そして、りんごのほっぺで笑っている左側の写真にキスをした。
それを見た千登勢は笑い、

「いまだにそんなことするお父さんなんて、異常よ」
と冗談半分に言ったことである。

そんなにもリュウジに愛されている娘——その娘に、今日、初めて会うのだ。

「やっぱりときどきしてきたわ……里穂ちゃんに電話入れなくていいの？」

駐車場から車を出しながらリュウジが言う。

「さっき電話した。もうじき帰るって」

料理が得意な里穂は、シチューを作って待っていてくれるらしい。

「楽しみ。理穂ちゃんのシチュー」

「おう。美味しいぞ」

リュウジのBMWは、ビロードの夜空の下、軽やかに走り出ていった。

千登勢、1971年9月18日生まれ。
リュウジ、1956年6月1日生まれ。

二人の未来を、千登勢はもちろん占ってみた。

占い師は自分のことを占っちゃいけないとか、占えないとかよく言われるが、確かに私情は入りやすいし、変な深読みをしてしまうことがある。

それでも、もう自分は一生ひとりかも、と思い始めていた千登勢にとって、リュウジとの出会いは神様がくれた最後のチャンスだと思われた。上手くいきそうなら逃したくないし、駄目なら期待したくない。

自分に孤独運があるのはわかっている。

そして、リュウジが結婚に向く性格じゃないことも、霊数を見て再確認した。

（もしや、こんな二人だから、何とかやれるかもしれない）

そう思うと千登勢は、黒いテーブルクロスの上にカードを並べた。ローズになって。いつもどおり、他人を見るように冷静な気持ちになって。

だが『月』の逆位置は出てきたものの、あとは『節制』、『審判』、『力』と、いいカードばかりだった。そしてそれ以上のカードを、千登勢はめくる気がしなかったのである。

（いいところで留めておこう）

ずるいけど、そう思った。

『月』が出るのは仕方がない。

『月』は不安のカード。
特に人間関係に関する。

（理穂ちゃんと上手くやれるだろうか。受け入れてもらえるだろうか）

そして、自分の母親――
（子持ちのバツイチなんて駄目だって、反対するかもしれない）

そう思いながら、思い切って最後の一枚をめくった時、千登勢の
決心は固まった。

『世界』。

（でき過ぎだわ）

自分の願望が出たのかもしれないけれど、嬉しかった。
信じようと思う気持ちが強く湧いてくるのを感じる。

――リュウジを、リュウジと出会った運命を、そしてリュウジを
選んだ自分自身を。

「おかえりなさい」

車の音で出てきたのか、エプロンをつけた里穂が玄関の前で待っていた。

高校生にしては小柄な、今風のショートボブにした女の子。
美人ではないが、ふっくらとした頬が可愛らしく、笑った顔は柔
道の谷選手にそっくりだと思った。

「占い師さんを連れてきたぞ」

あり得ない、照れた声。

「こんばんは、お招きありがとうございます。――榊原千登勢です」
「いらっしゃいませ。父がいつもお世話になってます」

里穂の愛想のよい言葉は、千登勢の一切の不安を吹き飛ばした。
ていねいに頭を下げながら、
「こちらこそ、お世話になってます。今晚は、ご馳走になりますね」
あくまで友達のように挨拶をした。

「どうぞ」

千登勢はリュウジとちょっと目を合わすと、促されるままに玄関
を入っていく。

そこに艶やかな深紅の薔薇が数本、花瓶に活けられているのを見
て、千登勢は目を見開いた。

「赤い薔薇は、千登勢さんの好きな花だって。お父さんったら、自
分で買うのが照れくさかったんですって」

里穂はペロリと舌を出す。

「わあ……嬉しい。理穂ちゃん、ありがとう――リュウちゃんも」

最後は小声になる。

リュウジも千登勢の耳元で言った。

「どういたしまして」

千登勢は思わず薔薇に触れる。

造花でも、木のボードに描かれた薔薇ではない、本物の薔薇に――
この手触り、この香り。

枯れない薔薇よりずっとずっと、素晴らしい。

『ミステイ・ローズ』の部屋――目の奥に、スワロフスキーの天使が、惑星のモビールが、暗い部屋で星の輝きをはなってきたらめいて
いるのが映し出される。

ふと、あの部屋に現実はずでにないことに気づいた。

それでもあの部屋は、ある。

そしてあの部屋を求めてくる人も、ある。

”ミステイ・ローズ”をやめるわけにはいかない。

――でも今は。今だけは。

心の中でつぶやきつつ、千登勢は二人に挟まれて、暖かな照明が
照らす、明るい部屋の中へと入っていった。

もしかしたら、いつか、そこがもうひとつの新しい自分の部屋に
なるかもしれないことを期待しつつ……

薔薇の香りがふわりと揺れて、夜はゆっくりと、更けていった。

—
了
—

第九話 千登勢（後書き）

お読みいただきまして、ありがとうございました!!
皆様的人生も、光に満ちた幸福なものでありますように♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0186e/>

～ミスティ・ローズの部屋へようこそ～

2010年10月10日13時31分発行